

弱い紐帯の強みその2

2021. 2. 5

臨床心理学者であるメグ・ジェイは「人生は20代で決まる」と言っている。20代のときに自分の好きな人たちとだけつきあうと、よいチャンスに出会えなくなると指摘している。狭い世界で生きてしまうと、弱い紐帯の強みのメリットを得られなくなる。仲のよい友人関係＝強い紐帯は、実は新しいことを運んできてはくれない。それを「強い紐帯のもろさ」と呼ぶ人もいる。以下に、メグ・ジェイの言葉を引用する。

「強い紐帯のもろさ」と呼ぶもの、すなわち、親密な友人がいかにかに人の進歩を阻むかが問題になります。強いつながりは快適さと親密さを与えてくれますが、支援以外にはほとんど提供するものを持っていません。彼らは普通似た者どうしですから、共感以上のものを与えるには似すぎており、膠着状態になっているとさえ言えます。仕事や人間関係について突破口がない状態です。

ゆるいつながりはあまりに自分と違うように感じられるため、親密になるには文字どおり距離が離れすぎている場合もあります。しかし、そこがポイントなのです。なぜなら、ゆるいつながりの人間は、似通っていて排他的な集団内の人物が持っていない新鮮な何かへと導いてくれたり、材料を手供してくれるからです。わたしたちが知らない事柄や人物を知っていることもあります。ゆるいつながりを介するほうが、強いつながりよりも情報やチャンスがよりたくさん、より早く得られるでしょう。

仕事や人間関係など、なんであれチャンスを求めるときには、ほとんど知らない人々が最も事態を打開してくれることになります。新しい機会はたいてい、あなたのグループの外からやってきます。ゆるいつながりを利用しようとしないうち20代は後れをとります。ゆるいつながりは、未知のものを見えるようにしてくれる架け橋です。

「弱い紐帯の強み」という巻頭言のタイトルを目にしたときに、何を言っているのかさっぱりわからなかった。興味がわき、調べてみると、「なるほど」と思った。そこで、皆さんにも紹介することにした。

さて、皆さんが所属している組織や集団は、「強い紐帯」だろうか、「弱い紐帯」だろうか。組織内あるいは身近に「弱い紐帯」はあるだろうか。弱い紐帯には「強み」がある。

よく考えてみると、教員の世界は、「強い紐帯のもろさ」の典型かもしれない。「教員の常識は世間の非常識」である。世間知らずの教員ではいけない。意識して、意図的に、「弱い紐帯」を求めなければならない。教員にこそ「弱い紐帯の強み」が必要である。